北斗句会（7 月）選句

田中資凡選

特選

NO.33 坪畑や曲がり胡瓜も侮れず

坪畑、曲がり胡瓜、侮れずの 3 語に無駄なく情景と心情が込められ偕味のある句だ。

選

NO.12 日傘差し颯爽と来る誕生会

どなたの訪問か、誕生会の華やぎが想起させる。日常の中の、特別な一日を美的に捉えた句だ。

NO.17 半夏雨机上にコロナ予診票

季語とコロナ予診票との取り合わせが面白い。季語が半夏雨であることで、句意に湿っぽさがなくてよい。

NO.35 日盛りや城壁ぐいと屹立す

季語日盛りと、中七、下五の措辞が見事にあっている。修復なった熊本城を想起させる。

NO.42 白南風や朝日に映ゆる伊良湖岬

季語白南風が、伊良湖岬の景観を見事に捉えている。白南風に立つ作者の心情も伝わってくる叙景句だ。

太田黒幸風選

特選

NO、26 今朝はまたひとつ上咲く立葵

立葵は何十という花が咲き誇りますが、いつどこが咲くのか気になります、私自身も毎日観て何とかしたかったのですが、見事に詠んでくれました。

選

NO，12 汝もまた過客なるかや蝸牛

のろのろと歩いている蝸牛も同じ旅人かー、諧味のある1句

NO 28 羅に女ざかりの風含み

羅を着た女性でしょう、すれ違った時になんとも言えない女性特有の香りがしたのでしょう、女盛りの女性が目に浮かびす。

NO、33 坪庭や曲がり胡瓜も侮れず

店に出す胡瓜は真っすぐでないと価値が下がりますが自分の小さな家庭菜園の胡瓜はどんなものでも価値があります。

NO、42 白南風や朝日に映ゆる伊良湖岬

梅雨晴れの明るい風景が目に浮かぶ良い句だと思います。

竹内雲泉選

特選

NO.33　坪畑や曲がり胡瓜も侮れず

「坪畑」ゆえに、不出来な「曲り胡瓜」に一段と愛着がわく。「坪畑や」で切って「坪畑」を強調し。二句一章に詠んだところがすばらしい。

選

NO.10　教へたる辻を曲がりし日傘かな

「日傘」が良い。初めて訪ね来る妙齢の婦人を門前に出て待つ。やがて日傘が見えほっとする・・・のとは違い、「尋ねられた道」を教えたが、心配で見送っていた？

NO.21　両国や四股名浴衣と擦れ違ひ

「四股名浴衣」は、幕内力士の着衣。部屋の多い下町の江東区では見ることはあるが、めったにお目にかから無い。たまたま出くわし、即それを詠んだところが素晴らしい。両国ならさもありなん。

NO.28　羅に女ざかりの風含み

最近は一種の流行か。薄手の上着やスカートなどの上から、更に一枚透けた衣服をまとっている女性をよく見かけるようになった。「女ざかり」が、色気十分。

NO.42　白南風や朝日に映ゆる伊良湖岬

「伊良湖岬」と聞くと胸があつくなる。梅雨のおわり頃の晴れた伊良湖岬の風景は素晴らしい。童謡「椰子の実」や三島の「潮騒」の神島をも連想させ詩情豊かである。作者は、愛知三河あたりの出か？

森田光彦選

特選

NO.２８　蘿に女ざかりの風含み

「風含み」に涼しさと上品な色気を感じます。

選

NO.１０　教へたる辻を曲がりし日傘かな

日傘の人は、美人？　作者の視線に残心を感じます。

NO.２６　今朝はまたひとつ上咲く立葵

立葵は散歩道にでもあるのだろうか、景が見えます。
よく観察されていますね。

NO.３０　白桃やふるさとの風運び来る

宅配便でも届いたのか、「ふるさとの風運び来る」の措辞がすばらしい。

NO.３５　日盛りや城壁ぐいと屹立す

余りの暑さに思わず天を仰いでいる作者が彷彿としてくる。「城壁ぐいと屹立す」の措辞が利いています。

山縣秀雄選

特選

NO.35　日盛りや城壁ぐいと屹立す

暑い中で中七で城壁の力強さを「ぐいと」よく表現しており、下五が活きている。

選

NO.12 汝もまた過客なるかや蝸牛

過客に蝸牛を取り入れた取り合わせが良い。

NO.23 万緑の隠し切れずに寺の屋根

中七が荘厳で壮大な寺院の存在を物語っており景がよく分かる。

NO.28 羅に女ざかりの風含み

羅のやわらかな感触が風を含み、中七が余計に艶かしい。

NO.40 夕立や土と野菜の話し声

夕立の音を中七で土と野菜を対比させて、下五の会話にしたのが素晴らしい発想である。

藤田紀潮選

特選

NO.26 今朝はまたひとつ上咲く立葵

「ひとつ上咲く」が秀逸。日々、上へ上へと一段づつ律儀に咲いていく立葵の様を適確に描写。一方で、立葵にこと寄せて、人（余生）の生き方を問いかけている。

選

NO.19 木曽路旅宿でもてなす蚊遣香

木曽路と蚊遣香の取合せが絶妙。「木曽路かな宿のもてなす蚊遣香」では如何。

NO.21 両国や四股名浴衣と擦れ違い

両国は力士のまち。出羽の海、春日野、時津風などの大部屋もある。

稽古あがりの若い力士とすれ違って、元気を頂戴。座５は「**すれ違ふ**」で。

NO.31 ちまちまとしゃぶるするめや半夏雨

するめ（屋内）と半夏雨（屋外）の取合せが面白い。「ちまちまと」には、「料簡が狭い」とか「けちくさい」などの印象も残るが高齢者の生活感覚が滲み出る。諧味。　　奥方不在時の昼酒の景は深読みか。

NO.33 坪畑や曲がり胡瓜も侮れず

小規模な農事を楽しむ作者。見かけは良くないが味は格別の胡瓜。

大崎石州選

特選

NO.26　今朝はまたひとつ上咲く立葵

毎朝、タチアオイの花が枝先に向かって咲いていくのを見るのは楽しみ。情景と時間経過が秀逸。

選

NO.12　汝もまた過客なるかや蝸牛

季語の活かし方が良い。

NO.16　背伸びして彩競ふ花菖蒲

画題の風景、リズムが良い。

NO.25　歩くほど深まる闇や蛍舞ふ

「歩くほど」とあるが何処を歩いているのだろうか？
「闇や」として強調しているが、「闇に」程度でどうか・。
螢を強調して、下五を「舞う螢」では・。

NO.40　夕立や土と野菜の話し声

畑いじりを趣味とする者にとって、夕立は水やりの手間が省けて嬉しい贈り物。　土と野菜の喜ぶ声が聞こえる。

長池豆陽選

特選

№27　草取や軍手で受くる喪のはがき

リアルな臨場感。草取り作業中の手袋のままで受けた喪のはがき、一瞬にして状況を理解し、深い感慨。日常の中の非日常的瞬間の切り口秀逸。

選

№10　教えたる辻を曲がりし日傘かな

道を教えて、結果を見届ける心優しい人ともいえるし、道を尋ねた妙齢な女性に魅かれて見送ったとも解釈できる諧味がよい。

№17　半夏雨机上にコロナ予診票

半夏生は忌の日、家に静かに籠る日、概して大雨、本年は実際に大雨だった。よりによってワクチン接種予定日、伝説と思いつつも困惑、諧味十分。

№33　坪畑や曲がり胡瓜も侮れず

商品にはなれない曲がり胡瓜は素人菜園では不可避。だが無農薬栽培で自然本来の本物の味、しかも鮮度よしですこぶる美味。侮れない、全く同感。

№35　日盛りや城壁ぐいと屹立す

遠景の城は華麗。だが、近くで仰ぐ城郭は堂々と屹立、炎暑などには全く動じない勇壮な姿は圧巻。これぞ日本の建築、日本の文化。

大森康正選

特選

NO.10　教へたる辻を曲がりし日傘かな

追視した作者の心中が興味深い。快いメロディーの一節感あり。

選

NO.12　汝もまた過客なるかや蝸牛

スピード化時代、生命の代表として、敢えて鈍重な蝸牛を登場。
無常な生命への愛おしさが助長された。

NO.23　万緑の隠し切れずに寺の屋根

夏の深い緑にも埋没しない、巨大で威厳ある屋根が彷彿される。中七が修辞。

NO.27　草取りや軍手で受くる喪のはがき

日常の一コマを上手に切り取れた。リアル感あり。

NO.35　日盛りや城壁ぐいと屹立す

暑さで弛緩した気分が、覚醒する様な威風堂々たる城壁。
「屹立」により句が引き締まった。

吉岡聖山選

特撰

NO、９　父の日や仰ぎ孤高の大鳥居

父親が稼いで家族を養っているのに、案外感謝もされず当然のことと受け取られている。しかし、本来なら仰ぎ見る大鳥居の様なものだ。と誰も言ってくれないので寂しく、一人つぶやいている。

選

NO、３　実がつきて安らぎえ百日紅

実がつきはじめて、百日紅とわかるので、実がついてよかったとの思いを述べている。

NO,２４　友訃報庭の紫陽花雨に濡れ

突然の訃報に庭の紫陽花も雨に濡れているようだ。最近、それにもだいぶ慣れてはきたが、やはり何故あいつがと絶句してしまう、そして、自分にも順番がきたななと考えてしまう。

NO,２７　草取や軍手で受くる喪のはがき

草取をしているときに軍手で受けてしまう。今回は軍手で受けたが、自分の時はどうなんだ。いま、こんなことをやっていていいのかと自問自答する。

NO,３６　カキツバタ見惚れし先に稚児走る

カキツバタの花に見とれていたらその先に稚児の走るのが見えたといふ。
何か、幻想を見ているよな感じである。
カキツバタの美しさが幻想を見さしているようだ。

宮下ひかる選

特選

NO　30.　白桃やふるさとの風運び来る

伝統・文化を擁し、詠み人の心に残る想いの全容を、何かしら風で彷彿とさせてくれる。

選

NO　16.背伸びして彩競ふ花菖蒲

花菖蒲園に多数の花が咲き競う様は、大小より、少しでも彩で魅せ望む。

NO　19.木曽路旅宿の果ての花西瓜

木曽路を旅してきて、宿の付近に西瓜の花が迎えてくれ、ほっとするスポットが輝く。

NO　31.　ちまちまとしやぶるするめや半夏生

少々長いひらがなを並べ諧謔、最後に結論は半夏生を強調し、目を見張らせる工夫かな？

NO　37.水べりに歓声の子や夏の池

句を詠む人共通の場面を引き出し、お互いに爽やかさに浸され、清々しい気分にさせてくれる。